

## 研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-169	15-050	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
<b>題名 (原題/訳)</b>		
Changes in alcohol drinking and subsequent sickness absence. 飲酒習慣の変化とその後の病欠との関連		
<b>執筆者</b>		
Salonsalmi A, Rahkonen O, Lahelma E, Laaksonen M.		
<b>掲載誌</b>		
Scand J Public Health. 2015 Jun;43(4):364-72. doi: 10.1177/1403494815574154.		
<b>キーワード</b>		<b>PMID</b>
飲酒量、問題飲酒、病欠		25743874
<b>要 旨</b>		
<p><b>目的：</b> 飲酒習慣の変化による病欠への影響について明らかにすることを目的とした。</p> <p><b>方法：</b> ヘルシンキ市の公務員（ベースライン：40歳から60歳の女性3,252名、男性682名）に対して、2000年から2002年および2007年に飲酒習慣に関する郵送によるアンケート調査を行い、週平均飲酒量および問題飲酒の変化を調査した。問題飲酒はCAGEスコアによって判定した。病欠日数については2度のアンケート調査の回答者を対象として、2007年から2010年末の雇用記録から自己判断による病欠と医師の診断による病欠とを区別して記録した。統計解析にはポアソン回帰分析を用い、飲酒量が適量かつ不変の群、問題飲酒の未経験群を対照とした。</p> <p><b>結果：</b> 飲酒量増加群の率比と95%信頼区間は、女性で1.38 (1.18-1.62) 男性で1.58 (1.18-2.12) であった。継続した問題飲酒（女性1.39 (1.26-1.54)、男性1.44, 1.10-1.87）および女性の継続した大量飲酒（1.53, 1.20-1.94）は自己判断による病欠を増加させる結果となった。男性のかつての問題飲酒群、女性の飲酒量減少群では医師の診断による病欠が増えていたが、これは健康上の問題や、健康改善のための行動変化によって理由づけられた。人口寄与割合からは、問題飲酒は週の平均飲酒量よりも病欠への影響が大きい傾向が見られた。</p> <p><b>結論：</b> 飲酒習慣は自己判断による病欠と関連していた。有害な飲酒習慣を改善することによって病欠を減らすことができる。</p>		